

佐多稲子全集

第十三卷／風になじんだ歌

講談社

佐多稲子全集 第十三卷



昭和五十三年十二月二十日第一刷発行

著者／佐多稲子

発行者／野間省一

発行所／株式会社講談社 東京都文京区音羽二―一二二 郵便番号 一二二

電話／東京（〇三）九四五―一一一（大代表） 振替東京八一三九三〇

印刷所／豊国印刷株式会社

製本所／藤沢製本株式会社

定価／二八〇〇円

©佐多稲子 昭和五十三年 盗丁本・乱丁本はお取り替えます。 Printed in Japan

目次

疵あと	272								
女人高野	254								
かたち	243								
石楠花	231								
母子抒情	218								
立ちおくれ	205								
結婚式	193								
あねといもうと	180								
幸福	168								
							*		
								風になじんだ歌	7

蝶々 281

冬日 294

女たち 307

お与津 320

秋の日の影 333

雪の峠 346

小梨の花 359

幼な声 372

あとがき・時と人と私のこと (12) 383

注解 390

初出誌紙・発表年月 392

佐多稲子全集

第十三卷

風になじんだ歌

一

そこは、いのちの街だった。今そこは、いのちの生の姿で、よろばいながらしかも殺気にみちていた。焼け残ったビルが脚元を露出して荒れた肌をさらしていた。駅の正面に高くはめ込まれた大時計は、傷痕にうなだれて針をとめたままだった。焼けあとの空地から舗道へかけて、葦簀張りの店が同じ格好で並び、スフの下着や、鍋や下駄や、食べものを売っている。男たちは戦闘帽のまま、肩から袋を下げて歩いていた。うす汚れた白と褐色の雑闇の中に、もんべの女たちもその色にとけて、何かの風呂敷包みをかい込んで歩いた。みんな同じような顔をしていた。同じような顔で混り込んでいながら、誰も、すれちがう相手を見もし

なかった。どの顔も、地べたに坐ることに慣れた顔だった。空だけは、秋の澄んだ色で展がっていた。その下で街は、いのちにうごめいていた。

柳井志保にとってもそこはいのちの街だった。彼女にとってそこはいわば古巣ということでもそれを意味したし、新宿東口の一隅に自分の居場所を確保したとき、志保は身内に懐えのみなざるのを感じたのだ。十年近いこの町の生活でこの界限は知りつくしている。そこに再び、自分の居場所をつかんだ。自分自身のものとしてそれを、とにかくつかんだ。それは柳井志保が心に決めてきたことの実現した第一歩だったのである。

終戦のとき、柳井志保は信州の赤石山派に沿った山の村にいた。彼女の世話をしていた森下勇造が、その山の木を伐って軍の弾薬箱などを作っていたが、志保は疎開のつもりもあって、森下に呼ばれるままに新宿を離れていった。新宿ではその頃すでに、志保の働く場はなかったから、何もせずに森下の世話にだけなっているのも、志保はあき足りなかったのである。森下は軍に結びついて事業を拡張しようとしていた。男の立てる計画に、志保は自分もはまり込んでゆこうと

していた。彼女は三十を半ば過ぎて、森下との仲も色恋のほかに、男の生活そのものに自分も参画してゆきたかった。志保はその四ヵ月ほど山の木工場の男たちの中で、持ちまえの明るい勝気さでいっしょに働いた。

陸軍から五十万円の資金が渡るといふ日、その当日が終戦であった。この山間に何かを構築するつもりだった軍は、貯蔵されていた弾丸をトラックに積んで運び出し、川の流れに捨てた。志保は河原に立つてそれを見ていて、戦争が負けて終った、と確かめた気がした。そのあわただしさの中で、将官と兵士の一部は、森下の林業を継続させてそこで自分も働きたいと云い出していた。五十万円の資金は出なくなったが、軍のトラックを見返り品にする、という案が持ち出されている。奇妙なことに志保は、このとき森下の事業に興味を失っていた。こんなところにいてもしょうがない。志保の心はもう、東京の慣れた街へ向いていた。東京へひとりで先に帰るといい出した志保に、森下はあやぶんだ答えをした。

「女ひとりで今の東京で何が出来る」

志保より十歳年上の森下は、材木の仲買をやってき

た仕事柄もあって、太っぴらな表情に狡かつきを秘めて、一種の男の魅力を持った人間だった。彼は、きりと光る視線で志保を見た。志保はもんぺ姿で、きちんと襟を合せていた。色の白い、たっぷりとした派手な顔だ。

「あら。そうかしら」

と、志保は鼻の上に笑いを浮かべて云った。

「こんなとき、女ひとりの方が却ってやり易いんじゃないかしら。どうせ、新宿ですよ。知った人も多いわ。私、大体、先ず行くところも考えているんですよ。どうしても駄目なら駄目でさ、また帰って来たっていいんだもの。だけど、あなただって、東京にひとつ足場を作っておくのはいいとおもうわ」

彼女は決してそれを口先で云ってはいなかった。理をとおした上で情もこめていた。またそれを裏づける実行力のあるのも森下は知っていた。

こうして柳井志保が新宿へ戻ったのは、終戦後もない十月だった。途中の列車は座席と座席の間にも人の割り込んでいる混雑で、身体をうごかすきもなかった。トンネルを通過するとき、ガラスの取れてしまった窓から、煙が巻きながら車内に流れ込んだ。志保

は煙でまっ黒になった顔を膝の荷の上に伏せて、心の中ではこれからの行動を必死に祈っていた。新宿へ着いたらやっぱり先ず、待乳山まちちやまの聖天さままでお参りにゆくの決めていた。

志保は杉並の松ノ木町に間借りしている親戚の家に身を寄せると、お召の着物の上にもんぺをはいて出かけた。出かけた先は、彼女の派手やかな仕事の間に知るようになった或る大きな料亭の女主人の許だった。麻布で焼け残ったその家は、表むきはまだひっそりしたまま、内部ではGHQの将校を招待した宴などがひらかれて、志保が訪ねていった夜も、殊更に古風に裾をひいた芸者が廊下を通っていった。それは昨日今日、新宿や浅草で見た雑鬧とあまりにかけ離れていた。

「さすがお宅ですね。もう御商売はじめていらっしゃるんですね」

戦後初めて逢うから、どっちも無事を云い合ったあと、志保は感服した表情で廊下をのぞいた。

「こうなるとね。今度はアメリカさんを招待なさなきゃならないんだわね。そういうおとくいさんからやいやい云われて始めたようなものよ」

志保よりずっと年長の女主人は、そう云うと、甘いものどう？ と羊かんを切ってくれた。

「虎屋でしょう。まあ久しぶりですわ」

この節らしいあいさつをしてから、切り出した。

「今日は、お願いがあつてうかがったんですけどね。私も働きたいとおもつて舞い戻ったんですよ。新宿に少し土地を借りられないかしら。こちらの御親戚があつたでしょう。ほら新宿の金物屋さんで、土地を持ったらっしゃるお宅。あちらにお願いして頂けないかしら。いいえ、店たつてほんの屋台ぐらいの場所です」

「そう。あんたやるの」

相手も苦勞人だから、すぐ真顔で受けて、

「森下さんと別れたの？」

「そういうわけじゃないんですけど。あつちはあつちで、山の仕事が続いていましてね。どうも私、やつぱり東京っ子なんですわ。戦争が終つたとおもつたら、もう、あんな山の中にいられませんわ。たつた四ヵ月余りだったんですけど、よくも居たもんだ、という気がしちゃつて。戦争中だからこそいたんですね。だから今度、小ぢな店でもやるとしたら、私ひとりや

「つてみよう」と覚悟してゐるんですよ」

「そりゃまあ、お志保さんならやれるわよ。それに新宿はあんたの縄張りだし」

「縄張りつてことはありませんけど。なじみは深いところですから多少、勝手はわかつてますね」

「聞いて上げるわよ。どうせ焼けあとがそのまんまであるんだらうから」

「そうですか。ありがたいわ。私、もしお願いできたら、一生懸命やります。ええ、一生懸命やります」

氣つぶのよさというようなものが志保にあつて、それが相手に氣持よく伝わる。というより志保は、自分の熱意を、たくましくして相手に伝えていた。これは彼女のさっぱりした明るさと、強い生活力に作用する頭のよさのせいだった。まだ盛り場に夜の賑わいのさかんだったとき、新宿の大きなカフェで志保がナンバーワンを通しつづけたのもこの性格によつていた。

こうして柳井志保は、その料亭の女主人の世話で、駅前の一隅の、焼けビルのうしろ側に少しの土地を借りた。地主は青山のある大きな金物屋だった。借りたといつてもまだこのとき、権利金などが幅を利かしてはいなかった。立退きを請求されたときは従うという

条件だけで志保はそこに板囲いと屋根だけの小屋を作った。内部は土間と板敷が一間だけあった。屋号を、この街でかつて彼女がナンバーワンをつづけたときの名をとつて、芳野屋と決めたとき、志保は、バラックに葦簀張りの小屋にその名の似合わしくないことなど思ひもせず、齒切れのいい口調で職人に愛想を云つていた。

この周囲に、食べもののやの小屋が建つたのは芳野屋一軒だけだった。前方はまだ瓦礫の散つた原っぱであつた。志保は大切にしていた割烹着をもんべの上に着て、自分の店の前に立つた。新宿駅の構内が荒れたまま開けひろがつて遠くまで見渡せた。丸通のあつたつづきに倉庫が一軒残つてゐる。倉庫に住んでゐる老夫婦ともう志保は挨拶を交すようになってゐるが、倉庫のかたわらに数本の葉鶏頭が、鮮やかな色で伸びてゐて、それが目にしみた。瓦礫の原っぱの中で、葉鶏頭の赤と黄は、今の志保に、いとしさをそそつた。老人夫婦の蒔いた種が、新宿駅構内に沿つた場所、わが生命を見せてゐる、そうおもつと、志保は、その種を蒔いた老人たちもいしく、涙を覚えた。

ああ、生きていてよかったと、涙に誘われた思い

が、そんな言葉で胸にあふれてきた。

「あらっ。赤とんぼが飛んでる」

志保がおもわず声を出すと、大工がちよつと振り返って云った。

「新宿で赤とんぼが飛ぶんだからね。とんぼぐらいじゃないですよ。青大將がいますよ」

「え、ほんと？」

「ほんとですよ。この間もそこらへんで見たんだ」

「殺さないでよ。決して殺さないでね」

志保は真剣な表情になってそう云った。

新宿は、屋は戦火をまぬかれた中央線沿線の住宅地につながってあふれ、夜は夜の欲望の町となつてたぎつた。芳野屋は夕方から夜明けまでの徹夜営業に客のひくことがなかった。

志保は屋からの仕込みでおでんを煮、酒をそろえた。ドブロク、バクダン、清酒。金さえあれば仕込みに困りはしなかった。ビールさえトラックで持ち込まれた。二合一勺の配給が、芋や大豆や澱粉でできていたとき、銀シャリが用意できた。

志保は疲れを知らぬげに、いつも張りのある声を上

げていた。女つけたつぷりなのに、勝気だから、どんな客とも一対一の応対ぶりで、よどみなく、さわやかだった。少し太い声に、貫禄さえあつて、しかもちつともそれが気張っているとは感じさせなかった。

その夜ももう二時近かった。女が連れてきた客もある。十人ばかりの客がドブロクやバクダンに酔つてとろんとした目をしてしゃべっていた。志保も酒がはいっている。ひとりの中年の客が、からみはじめていた。「ママは、目先が利いたんだな。いち早く陣取つて、えらく繁昌じゃないか。おれなんか、そんな知恵がないから、この敗戦の町にうろろしなきゃならん」

「あらそうですか。いいえ私だって目先が利いたわけでもないんですけどね。こんな商売しかできないからですよ」

「なに素早かったのさ。このへんじゃ一番先だろ。もつともそのおかげでおれはこうして呑んでるよ」

「ええ、そりやうちが一番早かつたでしょうね。とにかく私は、新宿に一日も早く帰りたいかつたんですよ。それだけなんです。新宿はいいですよ、の、気どつてなくて。大体昔から、新宿は隠れるのにいいところなんです」

「ママも誰かに隠れてるのか」

「いいえ、今度はそうじゃないですけどね」

「なんだ、今度はそうじゃなくて、以前にはあったみたいだな」

「そう。前にはあったわね」

志保はそう云いながら次には何げない笑い声を上げた。

そのとき前の空地で、シュールと、異様なひびきがあった。冷たく威圧して消えた。端にいた二人連れの客が、あつと、肩を立てて耳を澄ました。

「なんです？ 気持の悪い音でしたわね」

志保も聞きつけていた。

「機関銃だよ」

客は立ち上って外をうかがいたそうにした。

「だめよ。出ちゃだめ！」

客といた女がひそめながら叫び、店の中が一瞬いんとした。志保が表に聞耳を立てた顔で云う。

「機関銃の音ってあんなですね。バンバンっていうんじゃないのね。誰か、やったのかな。そう云えば機関銃持って歩いてますよ。はち巻して日本刀さげて、竹やりまで持ってねえ」

「敗戦日本の現実か」

「しかし、おもしろい出したな。あの、シュルシュルって音、あれを聞くと首すじのうしろのところが、かゆくなったもんだった」

さらばラバウルよ、またくるまではア、と、ひとりが歌い出した。とすぐ連れもあとをつづけた。こうなれば次々と軍歌の出るのがきまりで、志保もいっしょに歌い出していた。

店を閉めてから、志保は夜半の機関銃の音をおもい出して外へ出てみたが、電柱の下に転がっているのは、別の死人らしかった。浮浪者の老人で、顔だけ二倍にもむくんでいるのは栄養失調にちがいがなかった。

志保は店を開いてまだ一ヵ月だが、夜明けの空地で死人を見るのは初めてではなかった。

博徒の組とテキヤの大きな組があつて、無秩序にあふれる新宿にその縄張りを拡げながら、そのことでこの街の復興にも役立っているという実状は、このときの東京の混乱を語っていた。だから機関銃を持って歩く男も、日本刀をさげた男もいて、一人、二人はざら、六人の人間を殺したそうなどという若い男もここを歩いていた。透きとおるほど蒼い色をして、目だけ据

わった無表情の、そして顔立ちのとのつた男だった。喧嘩だ、助つとだ、とあたりがざわめくのも珍しいことではない。

志保の今までの生活が、いわば新宿の内側にあったから、同じ側の人間のような気がしないわけでもなかったし、始終そんな男のそばにいて、だんだん度きょうができてゆくみたいだった。殊にこの秋、組の若い者たちが角力大会を開くというので、寄付を集めてまわったときのことだった。

まだ夕方の客のたて込むには早い時間であった。二人の若い男が油障子をあけて入ってきた。一人の客があるのを見ると、男たちは、明らかに礼儀的に隅の方へゆき、向うむきに立った。

「お兄さんがた、なあに！」

志保はちよつと腹に力を入れ、その方へくぐり出て行った。小柄な背をどことなく意気に、まっすぐに立てた男が、几帳面なもの云いで用件を云った。

「ああそう。よござんすよ。ちよつと待ってちようだい」

志保は奥から百円札を三枚握って出てきた。

「これでかんにんして下さいね」

男たちは、やあ、と云って頭に手をやり、腰をかがめて、小声で云った。

「おねえさんとこじゃ、こんなに頂くつもりもなかったんですがね」

「屋台みたいなうちですからね」

「いえ、いえ」

そして寄付帳をひらいて、ね、という上目つかいでひとつを指さした。それは電車通りの百貨店の寄付で、それが志保の今出した百円札三枚と同額だった。

「おや。じゃ、あんまり出しゃばることになるかしら」

志保は狎れた表情になって男たちを見てから、

「だからって、引っ込めるわけにもゆかないじゃないの。いいからおさめてちようだい」

「はいっ」

男たちは敏しような動作で、志保に署名をさせると、札を述べて出た。意気な身体つききの男は、顔立ちもそんなふうで、志保にほんのり心地よかった。

そんなことがあってから、組の男たちの志保に出会うときの様子が變つて、当りがよかった。気の軽いひとりとなど、ある朝、店じまいをしている志保を見かけ

ると、こう云ったものだ。

「おねえさん。何か困ることあったら、云って下さいよ。おねえさんには、氣をつけてあげなくちゃいけない、って、親分に云われてるんだ」

「あら、どうもありがとう。そうなの。親分、そう云ってくれてるの。嬉しいわね。よろしくおっしゃって」

「へい」

志保は、寄付の百円札三枚が、そんなに利いてると知らなかった。このときの百円札三枚は、志保の方だつて、はずんだつもりだが、それは太っ腹な彼女の心意気というものだった。志保の三百円は、心意気の見せどころだった。相手方にもそれが伝わったのだらう。志保はただ、その三百円が、表通りの百貨店の出したものと同額だったと知ったとき、ちよつとばかり傲ぶった、いい氣がした。志保はやっぱり、新宿の女だった。

やっぱりそういう朝だった。薄明りの中で周囲はさすがに音を立てず、疲労の中で街はまだ眠っていた。

志保は油障子の外に葦簀をまわしていた。空地の向う

から歩いてくる姿が影のように見える。

「お早う、ママさん」

しゃがれた声でわかった。

「お早う。今、帰るの。寒いわね」

銭湯で逢う女だ。

「寒いわ」

如何にも慄えている声だった。

「ちよつとあつたまってゆきなさいよ。まだ火があるわ」

「ちよつとあたらして」

ばさばさの断髪をうしろにたらしめて、前髪だけくると巻いている。まん丸い顔だから若く見えるが、氣力もなげで頼りない顔をしていた。スフのスポンをはいて、男ものだったらしいオーバーをたらんときいていた。

「どこまで帰るの」

「十条。子どもが学校へ行くんでね。それまでに帰ってやらなきゃならないのよ。子どもに朝御飯たべさせて学校へ出してやって、それから寝るのよ」

「大変だわね。いくつ？」

「二年生」